

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第124号

イザヤ 65:1

平成18年1月27日

自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるので、あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどまでに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくして下さらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。 マタイ6：25－34。

イエス・キリストは直弟子十一人への最後のメッセージの中で、「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」と言われました。真理を憎むこの世では、イエスを信じ従う者には、霊的、精神的、肉体的な困難、辛苦が伴うこと、また、キリストの証し人としての人生が決して楽ではないことを語られたのでした。しかし逆説的に、罪人として十字架上で人々から嘲弄されて死ぬキリストこそ、この世の勝利者であるとも言われたのです。このキリストを受け入れる者を、父なる神がキリストを愛し受け入れられたように、父が愛し受け入れてくださるので、患難、迫害に苦しむことがあっても、キリストに従う者はこの世の勝利者であるという約束でした。

信者、未信者を問わず、この世にあってはいろいろな領域での戦いがあります。たとえば、何か悪いことが起こる予感がするとか、どうせうまく行くはずがない、今度も駄目に決まっている、すべてが失敗したらどうしよう等々、振り払おうとしても幾倍かになって戻ってくる否定的な思いに悩まされたことはないでしょうか。ところが現実には心配とは正反対にすべてがうまくいき、全くの取り越し苦労であったという経験は、結構起こっていることなのです。あの飛行機、あるいは、あの電車に乗ったら事故が起こるといった思いに取りつかれ、不安で不安でたまらなかったのが、そのような災いが起こるどころか、すべてがうまく行ったというような、後から振り返れば、なぜそのような不安に駆られたのかわからないという体験は、大なり小なりすべての人の人生に起こっています。私たちはなぜこのように始終不安に駆られ、思い煩い、取り越し苦労をするのでしょうか。冒頭に引用した件が教えているのは、そのような不合理な心の反応、過度な心配は、個々人に必要なものをすべてご存知の父なる神を知らない「異邦人」には起こることであるが、「神の国とその義」とを第一に求める信者には起こらないことであるというものでした。キリストの教えによれば、信者はそのような思い煩いから一切解放されているはずなのです。

ここでイエスが対象にされているのは、働かないでどのように生計を立てればよいかと安易な道を求めている『怠け者』では勿論なく、先々のことまであれこれ心配して解決の助けにならない不必要な思いを巡らし、不合理な取り越し苦労に悩まされている『真面目な者』です。したがって、怠けることを奨励している教えでないことは明らかです。また、この教えは、父なる神を信じない異邦人と神を信じる者との比較で語られていることから、取り越し苦労、不要な思い煩いから解放されるに必要な鍵が信仰の有無にあることも、明らかに示唆しています。この同じ教えが語られているルカの福音書の文脈では、先行する教えが、この世で安心して長生きするために穀物、財産を自分のために蓄えようと考えた貪欲な金持ちを、主が、「自分のためにたくわえても、神の前に富まない」愚か者とみなし、一瞬のうちにいのちを取り去られたというたとえになっています。この文脈からこの教えには、神が望まれる人生への方向性を読み取ることができます。ルカの文脈では、永遠のいのちはおろか、どのような手段を選ぼうと、この世で長生きすることすらままならない人の無力さを訴えたたとえから、「自分のいのち」を延ばすことに何の助けにもならない自分中心なこの世の手段にあれこれ

思いを馳せる愚かな「心配」はやめなさい、という教えにつながっているのです。「神の国とその義とをまず第一に求めなさい」とは、キリストを受け入れ、神に信頼するだけでなく、神の御旨にかなった生き方を今しなさいということです。実際、そのように生き始めると、神ご自身がすべての面倒を見てくださるので、敵の誘惑にさらされ、問題の多いこの世にあっても、一切の思い煩いから解放される歩みへと導かれていくとイエスは教えられたのです。

それでは、世のクリスチャンが全員、イエスをキリスト（救い主）として告白したことによって、人生にまわりつく不安との戦いから完全に解放され、主が約束されたようにいつも主にある平安を得ているでしょうか。もしそのように報いがすぐに人生に反映されるものであれば、今日までに全人類がクリスチャンになっていたことでしょう。残念ながら、現実はそのような場合がほとんどで、キリストの教えの解釈の仕方か、あるいは自分自身の信仰かの何れかに問題があることになります。しかしこの問題に答えを見つけるのは難しいことではありません。キリストの教えも使徒パウロの書簡も一貫して後者に問題があるとしています。言い換えれば、人生の諸問題のほとんどは、神によって解放されていない『人の心』の問題なのです。このことをパウロは「私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。私たちの戦いの武器は肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。私たちは、さまざまの思弁と神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、また、あなたがたの従順が完全になるとき、あらゆる不従順を罰する用意ができています。」（コリント第二 10：3—6）と言い表わしています。なるほど、私たちは物質的なこの世で肉の体で生きていますが、私たちの内には、肉でも物質でもない別の領域での戦いが続いており、この『霊の戦い』は、神によって与えられる武器によるのみ勝つことのできる戦いなのです。

ここでパウロは、私たちがキリストに従順になるために服従させなければならない三つのことを挙げています。それは、（1）私たちの心の中に理由なく湧き上がってくる否定的な思いやこの世の常識、体験に基づいた考え（「さまざまの思弁」）、（2）神に反逆する心（「あらゆる高ぶり」）、（3）神の御旨を損ねる自分中心なこの世の手段（「すべてのはかりごと」）で、これらはすべて、人の心の中に生じるものです。自分自身の中に、神に従順にならせまいとして、しつこく頭をもたげてくる自己の「要塞」が優勢である限り、この心の中に起こる霊の戦いは続くのです。打ち砕いて完全にキリストの支配下に置かなければならない自己の「要塞」とは、誇り、慢心、偏見、先入観など神の言葉に素直に耳を傾けることを拒否する心の状態です。キリストに服従して神を優先にするか、反対に自分の欲望に従い自我を優先にするかという私たちの心の中に起こるこの霊の戦いに勝つには、神が与えてくださる武器を用いる以外にありません。それは、霊の戦いには背後に、人を神への従順、神ご自身から引き離そうとする何者かの力が関わっているからなのです。それは、神に従う者を弱みにつけこみ、わなに陥らせ、墮落させようとする悪魔の働きです。このような悪魔の策略に立ち向かうための神の武具とは、自己を守るために腰に「真理の帯」、胸に「正義の胸当て」、足に「平和の福音」、体に「信仰の大盾」、頭に「救いのかぶと」、そして攻撃する武器として「御霊の与える剣である、神のことば」を用いることであると、パウロはエペソ人への手紙6章で語っています。これらに加えて、御霊による「祈り」は、これらの神の武具を勇敢に使い、有効ならしめるために欠かせないもので、敵の攻撃を完全に打ち砕くには「神のことば」と「祈り」の力が絶対必要になります。

したがって、この『人の心の中の戦い』とは、自我を神の側に引っ張る力と悪魔の側に引っ張る力によって引き起こされるあつれき、葛藤なのです。神と悪魔の真中に自分がはさまれていて、どちらに傾くか選択を迫られている状態であると考えれば分かりやすいかもしれません。もし自我が神への絶対的服従の下に置かれているなら、すなわち、キリストが弟子たちに解いた「だれでも私について来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのち（ギリシャ語では「魂」）を救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。人はたとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら…」（マタイ 16：24—27）の状態に自分を置き、神や他人を優先する生き方を選んでいたら、私の魂（心、自我）は、キリストの隷属下に置かれているということ（キリストのために自分を捨て、失った状態。肉に生きるのではなく、霊に生きる状態）、永遠に生きる「まことのいのち」の報酬に与る者とされているということなのです。この報酬が具体的な形を取って現実のこととなるのは、キリストの再臨のときですから、主がいつ戻ってこられてもいいように備えをして待つ忍耐が、信者に要求されるのです。

しかしこのようにキリストに全信頼を置いて「自分を捨て、自分の十字架を負（う）」霊の歩みを始めるとき、『神の国とその義とを第一に求める者にはすべてのものが添えて与えられる』という御言葉が成就します。私たちの必要をすべて知っておられる父なる神に自分の心も体も委ねることのできる者は、「あすのための心配」をする必要がなく、取り越し苦労、思い煩いから完全に解放され、イエスが約束されたこの世の何物にも揺るがされない主にある平安を未来のある時点（主の再臨のとき）を待たなくても全体験できるのです。反対に、自我が悪魔の誘惑に負け、神から離れると心の中に不法が満ち、いろいろな問題が起こり始めます。先に引用した心の中に要塞が立ちはだかる状態です。この状態から解放されたければ、ただキリストに完全服従することです。不完全なこの世でのクリスチャンの歩みは、まさにこの霊の戦い一人の心の中の戦いを日々勝ち抜いていくことだから本当に大変なことです。しかし、「あなたがたのうちの良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。」（ペリピ人 1：6）とパウロが語ったように、霊の戦いで勝利は自分の努力によるのではなく、幼子のように主に自分のすべてを委ねることによってのみ与えられる勝利であることを今一度、思い起こす必要があるでしょう。